

令和 6 年度
新時代に対応した高等学校改革推進事業
(普通科改革支援事業)
第 1 年次 事業報告書



大阪府立狭山高等学校

翔べよ遙か 狭山生

大阪府立狭山高等学校 校長 松永 淳子

大阪府立狭山高校は、令和6年度に創立45年を迎えました。通常の授業に加えて行事や部活動、地域交流や国際交流などを柱に教育活動を行ってきました。創立当時から、地元の皆様や大阪狭山市とのご縁は深く、地域のイベント等に参加したり学校の行事など教育活動にご参加いただいたりと交流を深めてきました。その流れの中で、令和5年1月には正式に大阪狭山市と本校の間で包括連携協定が締結されています。また、海外姉妹校にも恵まれ、韓国の景福高校とは2008年10月に、オーストラリアのキャリアバプティストカレッジとは2014年7月に姉妹校提携を締結し、直接の交流はもちろんのこと、感染症流行期にもオンライン交流で関係を深めてきました。

狭山高校の魅力は沢山あります。狭山池をはじめ、周囲は美しい自然環境に恵まれています。空は広く、雲の色や形は刻々と変化していきます。朝の通勤路では鳥のさえずりが聞こえます。普段はやさしい西除川も天候により大きく表情を変えます。毎日見ていても飽きません。

正門を入ったところに創立20周年記念の碑があり、そこには「翔べよ遙か」という校歌の一節が記されています。狭山高校の卒業生は、大阪狭山市をはじめ近隣地域の至る所で第一線で活躍されています。この碑の言葉どおりに、諸先輩方が築いてこられた狭山高校の輝きを、これからも失うことなく引き継いでいきたいと教職員一同強く願っています。

その中心である生徒の力をさらに伸ばす教育活動をめざして、令和5年度からは大阪府の「リーディング GIGA ハイスクール」の指定校として ICT 機器を活用した教育活動の研究に取り組んでいます。すべての普通教室に電子黒板機能付きプロジェクターが配備され、視聴覚教材を活用した授業の工夫を行っています。今年度は遠隔地への配信を想定した研究授業も実施しました。設備の充実を生徒の学びの充実に繋げる取り組みを続けています。

新たな展開として今年度、文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革推進事業）」の指定を受けることとなりました。「新しい普通科」「特別な普通科」として、探究的な学びを深め、大学進学など生徒のめざす進路実現を支えるカリキュラムを研究・開発していきます。この事業により、本校は、今まで諸先輩方が築いてくださった伝統を大切にしながら、今後、更に発展していく「新しい普通科」として探究的な学びを大切に作る特色を打ち出していくことになります。また、今年度は文部科学省の「高等学校 DX 加速化推進事業」指定校にも選ばれましたので、先にご紹介しました事業とも連携して、生徒たちの探究的な学びを強化するために必要な学習環境を整備していきます。

これからの時代は、変化が激しく予測が困難な時代になると言われてきました。それを前提に、これからの時代を生きる若い人たちには、これまでに経験したことのない、急速で大きな社会の変化に対応していく力、予測できない変化を前向きに受け止め、主体的に向き合い関わり合い、自らの可能性を発揮できる力が求められています。現在、本校が取り組む事業により、狭山高校で学ぶ生徒が、自分のやりたいことを見つけ、社会生活で関わる多くの人たちとの協働や挑戦を通して自分の世界を広げ、満足のいく幸せな人生を送ることを願って、保護者の皆さま、地域の皆さまのご協力をいただきながら、教職員一同進んでまいります。

最後になりましたが、運営指導委員会、コンソーシアムで御指導・御支援を賜りました委員の皆様をはじめ、本事業にご協力いただいている皆様に深く感謝申し上げますとともに、これからも引き続きの御指導・御支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

目 次

I 事業の概要（文部科学省提出 令和6年度 実施計画書）	・・・ 1
II 普通科改編に向けた教員向け研修について	・・・ 19
III 新学科における教育課程の編成について	・・・ 21
IV 新教育課程の実施に向けたグランドデザインの策定について	・・・ 23
V 先進校視察報告	・・・ 25
VI コーディネーター 活動報告	・・・ 27
VII コンソーシアム会議 議事録	・・・ 35
VIII 運営指導委員会 議事録	・・・ 36
IX 探究活動報告	・・・ 38
X 先行実施授業「大学模擬ゼミ」実施後アンケート	・・・ 57
XI 探究学習成果発表会	・・・ 58
XII 事業完了報告書	・・・ 64

I 事業の概要（文部科学省提出 令和6年度実施計画書）

実施計画書（普通科改革支援事業）

1 事業の概要

（1）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	大阪府立狭山高等学校 (おおさかふりつさやまこう とうがっこう)	地域社会学科	令和8年度	

※学科の種類は学際領域学科又は地域社会学科、その他普通科の別を記載すること。

※設置（予定）年度は令和6年度、令和7年度又は令和8年度を記載すること。

※教育委員会等における決定を経ている等、組織として設置が決定している場合には、
「決定」欄に○を付すこと。

（2）学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	240（1学年）	学年制	

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

（既存の学科を転換する場合は、以下も記載）

現在の生徒数	現在の学科の種類	現在の学科の名称
713 人	普通科	普通科

(3) 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

<概要>

「地域社会に貢献する国際的知見を持ったリーダーを育成する」ことを事業の目標とする。

「守破離」をモデルとした、「自分ごと」の学びを深化・完成させる学習プログラム『深学探究』を実践する。

常に課題意識をもち、「自分ごと」として思考するための学びを実践する。自己表現を高める基礎講座、地域行政と連携した課題解決探究（判別学習）、高等教育機関による個別課題解決型探究（個人別学習）といった段階的学習によって国際的知見をもったリーダーを育成する。同時に地域との交流を重ね地域に根差した学校活動を更に活性化させる。

<取組み>

I、地域行政機関と連携した課題解決型探究の実施 ⇒ 総合的な探究の時間

表現力・論理的思考力を深める探究の基礎的な探究活動、地域の行政機関と連携して課題解決をめざす発展的な探究活動を通して、地域社会に貢献する資質・能力を身に付ける。

- ①表現力・論理的思考力の向上をねらいとした「ソーシャルスキル育成講座」や「クリティカルシンキング育成講座」、「校内ビブリオバトル」等の実施
- ②大学と連携した探究サイクルに関する「深学探究基礎講座」の実施
- ③地域行政機関と連携した課題解決型探究活動「地域社会ゼミ（仮称）」の実施
- ④③の活動の深化を図る地元商工会等と連携した「フィールドワーク」の実施

II、教科横断的な探究活動の実施 ⇒ 学校設定教科・科目

2年間における「深学探究」の完成を目的に、自己の探究をさらに深めるために、教科横断的な探究活動を行うとともに、地域と一緒に探究活動の成果を発信する活動をとおして、地域社会に貢献する資質・能力をさらに身に付ける。

- ①地元行政機関・企業等の地域全体と協働して「地域社会研究発表会（仮称）」の開催。
- ②2年次までの各教科・科目での学習成果と、「地域社会ゼミ（仮称）」における探究活動の成果をより関連づける「深学探究演習（仮称）」の実施。
- ③研究成果の論文執筆活動を実施。

III、コンソーシアム構築

地域の社会課題について解決をめざす学習を推進するために、地元の大阪狭山市・大阪狭山市商工会・大阪狭山市教育委員会と本校が一体となって、市の課題の解決をめざし、地域社会及び教育のネットワークの強化につなげる。そのために地域の資源を活用した探究活動はもとより、近隣大学・企業・国際機関とコンソーシアムを構築し、複数かつ教科横断的な地域社会の諸課題の解決をめざす探究活動の充実を図る。

2 事業の目的等

(1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科等を設置する必要性

本校の所在地である大阪府大阪狭山市は大阪府の南河内地域といわれる南東部に位置し、人口 58000 人余りの都市である。交通の便も良く、南海電鉄・南海高野線が南北に延び、南は和歌山高野山、北は大阪市内までのアクセスが可能となっている。各学年 6 クラス、計 713 名が在籍している。南河内地域の人口の減少に加え、大阪府の学区撤廃による生徒が自由に学校を選択できる環境によって、大阪府北部の高等学校への進学者が増加し、クラス減少も相まって本校が独自の魅力を新たに創出する必要性が高まっている。

そこで、地域社会と国際的に活躍する人材を育成することを本校の課題として掲げ、地域を担う「ローカル」と国際的見地を養う「グローバル」を柱とする、「グローカルハイスクール」として活動を実践し、「グローカルリーダー」の育成をめざしている。

本校が定義するグローカルリーダーは「生まれ育った地域を想い、実践家として活躍できる人材」となるために、「世界を見据えた視点で直面する事象や課題を俯瞰・思考し、解決に向けて地道に探究する人材」である。地域・世界両方から求められ、愛される人材を育成することが本校の使命である。

現在の大阪府においては、人口が減少する地域の増加、地域産業の停滞等、現実的に抱える課題が山積している。その課題を逆手に取り、「ローカルの視点から見た課題」と「グローバルの視点から見た課題」とを結びつけて思考・追究し、世界規模で活躍するリーダーを育成すべきである。その役割を担うことができるのが本校であると考え。約 20 年前に豪州・韓国との交流が始まり、相互訪問やオンライン交流を通じた異文化体験を重ねることで世界の中の狭山高校を意識する契機となり、現在生徒の視野を広げる一助となっている。現在の本校の探究活動を考えるにあたり無くてはならないものとなっている。

地域行政機関との連携は、令和 4 年度、大阪狭山市と包括連携協定を締結し、市内の中学校と授業見学や文化祭における文化部の合同発表など相互交流を行ってきた。また、大阪狭山市では「地域と共にある学校づくり」として、市内の全小中学校が教育課程特例校として文部科学省の認可を受け、生活科や総合学習の時間を活用し「地域学習」として地域の人々との交流や大阪狭山市の歴史文化の系統的な学びを通して、グローカル人材の育成を進めている。こうした特色ある取組みと連携し、義務教育段階から高等学校段階まで一貫した地域学習を進めていくことで、地域に根差した学校づくりを進めていくことができる。加えて、行政機関とは公民館等市民交流をおこなう行事に部活動・生徒会の参加、また地域諸団体とともに狭山池まつりの運営に携わるなど、1 年通して地域との連携を継続している。

その他の教育機関の連携としては、近隣の桃山学院大学と連携し課題解決型探究授業を実践している。具体的な実践例として、ビジネスデザイン学部とミズノ株式会社との連携による商品開発プレゼンテーションを実施、本校生が新たなスポーツ商品についての提案を行い、情報収集・思考・提案といった自己表現能力の育成と情報発信の重要性についてより実践的な学びを行っている。また、大阪公立大学をはじめ、複数の大学の教員を招聘し、「大学模擬ゼミ」を実施し、将来の進路について考えるとともに、学ぶことの大切さを深く考えさせる授業を展開している。

これらの地域社会と連携した取組みと学術的な取組みを一層深く学ぶ環境を作り、地域や大学、企業等とコンソーシアムを構築し、生徒が能動的かつ、協働的な学びを実践する環境を創出することにより、大都市圏を支える地域社会の重要性を再認識させ、世界に羽ばたくリーダー養成が可能となる。以上の点からも本校が地域社会学科の学校としての役割を担い、活動することが重要であると考えている。

(2) 学際領域学科又は地域社会学科等における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科等における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

I、育成をめざす資質・能力等

- ・主体性（課題設定力）・協働性（共創力）・探究性（批判的思考力）・社会性（グローバル意識）を兼ね備えた地域社会に貢献する国際的知見を持ったリーダーの育成
- ・現在の本校の探究活動では、教員や行政等から与えられた課題について、情報収集を行い、まとめ発表することが中心となっている。情報収集やまとめ活動を通じて情報活用能力の向上等は期待できるものの、生徒自らが課題を設定して、主体性や探究性をもって、課題を解決していく力の育成ができていないことが課題である。
- ・現在本校で実施している国際交流については、個々の活動に目標を設定し実施しているが、参加人数も限定的であり、単発的な取組となりがちであった。そのため、探究活動において、地域社会の課題解決に取り組んでいくにあたり、国際化が進む社会的背景をふまえ、多様な文化や考え方に触れ、グローバルな視点を身に付けることで、「ローカル」な課題に対する視野や知見を深めるなど、社会性（グローバル意識）を育成することが課題である。
- ・本学科では、教員や行政等から課題を与えて探究するのではなく、生徒自らが地域社会の課題を発見し、グローバルな視点をふまえ、主体性・協働性・探究性を養いながら課題を解決できると共に、探究活動と国際交流を結び付けた取組みを行うようなカリキュラムを総合的な探究の時間及び学校設定教科・科目において実施する。

II、総合的な探究の時間

大学等と連携し問いの立て方やデータ分析、発表などの探究スキルを育成するとともに、地域社会の様々なテーマにおける課題解決に向けた探究活動を行う。地域の行政機関・企業等を巻き込んだ探究活動成果発表会等を実施し、生徒の主体性や協働性を育成するとともに、地域社会への貢献意識を高める柱となる活動を行う。「生徒のコミュニケーションスキル」の向上、「課題解決型思考」を育成するためのディベートや小論文執筆等を「深学探究」で実践、単元毎に振り返りを行い能力の定着を図る。

III、学校設定教科・科目

学術的専門分野から幅広い見識を養うための「深学探究演習（仮称）」や、地域の方々と共に創り上げる「地域社会研究発表会（仮称）」を通して、自己のキャリア形成はもとより、卒業後のライフプランニングを見据え、幅広い視野で学び続ける主体性、地域貢献の意識の向上を目的とする。「深学探究演習（仮称）」では地域的課題、及び国際的視点からみた地域の課題を解決するための調査研究を生徒一人一人が行い、成果について小論文またはプレゼンによる発表をおこなう。

IV、国際交流

地域社会学科の主たる特色である地域（ローカル）の課題を知り、課題の解決をめざす取組みを行う上で、地元地域のみを研究するだけでなく、他国の文化や考え方等のグローバルな視点を学習することで、多様な視点からローカルな課題を捉えることができ、急速に進展するグローバル社会の中で生きる生徒たちが、高校卒業後も多様な視点で課題を捉えることができ、真の社会性が身につくと考える、そのため、本事業においても、国際交流と探究活動を関連づけ、グローバルリーダーの育成につなげることが必要である。姉妹校提携を結んでいる高校との交流、JICA 関西と連携した課題解決研究から国際的知見及び地域との関連性について学びを深める。

3 実施体制

(1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

本事業の管理・指導・支援については、大阪府教育庁教育振興室高等学校課が行うこととする。
本事業の実施校が「めざす生徒像」を具現化するために、高等教育機関、地域の行政機関、教育委員会、商工会、一般社団法人等からなるコンソーシアムを構築し、協働して多様な分野の学びに接したり、複合的な学問分野や新たな学問分野に触れ、社会における課題の解決に向けた探究的な活動ができるよう支援するとともに、3年間を通した体系的な取組みを実施できるよう指導助言を行う。

また、事業の実施に必要な教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問し、事業の進捗を確認するとともに、必要に応じて指導助言を行う。

I、主に、以下の点を確認し、事業の管理を行う。

- ・事業の趣旨や目的に沿った取組がなされているか。
- ・当初の計画から変更はないか。不可避の変更に対して、適切に対応しているか。
- ・大阪府の方針（「第2次大阪府教育振興基本計画前期事業計画」・「府立高等学校再編整備計画」）に則った取組み内容となっているか。

II、運営指導委員会の設置

- ・大学の教授や地域の行政機関、国際協力機構等からなる運営指導委員会を設置する。大阪府教育庁は運営指導委員事務局員として支援を行う。
- ・年3回程度、探究活動の実施日や生徒研究成果発表会とあわせて開催し、事業における取組みの効果や生徒の変容を直接見取るとともに、事業の進捗状況の確認を行うことができるようにする。

III、担当者会議の運営

- ・管理機関である大阪府教育庁と、普通科改革推進事業の令和6年度採択校（府立狭山高校）と次年度申請を検討している高校とあわせて2校の担当者及びコーディネーターを含めて、本事業に係る取組みの進捗状況の報告や、情報の共有等を行う担当者会議を設置・運営する。また、2校以外の他の普通科高校の参加校を募り、2校がモデル校としての役割を担う。

IV、その他

- ・運営指導委員会会議や生徒の発表会等以外にも、定期的に学校を訪問し、指導助言を行うとともに、随時、事業の検証・改善への提案を行う。

(2) 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

I、事業評価の体制について

- ①コンソーシアム会議での検証・評価（10月・2月）
 - ・探究活動への研究支援及び生徒のキャリア形成への支援の充実に向けた取組みの検証及び評価を行う。
 - ・コンソーシアム機関と連携した取組みの活動数等の推移から、本事業におけるコンソーシアム構築について、多角的かつ学術的な視点から検証及び評価を行う。
- ②運営指導委員会での検証・評価（11月・3月）
 - ・コンソーシアム会議等から報告された意見や検証結果を踏まえ、事業全体の成果検証及び評価を行う。
 - ・運営指導委員会での成果検証及び評価の結果についても、コンソーシアム会議等に対してフィードバックを行う。
 - ・本事業で開発する事業評価のためのループリック評価の結果まとめ等から、事業全体の取組み等、本事業のアウトカムとのつながりについて、客観的かつ学術的な検証及び評価を行う。
- ③担当者会議での検証・評価（年2回）
 - ・担当者会議における事業の進捗状況の報告、生徒の意識変容のデータ等を踏まえ、事業の成果検証及び評価を行う。
 - ・生徒の意識変容のデータ等と本事業で開発するループリック評価との関連性から、育成をめざす資質・能力の育成について継続的に検証及び評価を行う。

II、事業評価の考え方

- ①めざす生徒像や育成すべき資質・能力の明確化
 - ・学校の教育目標やスクールミッション・ポリシーから本事業で育む資質・能力の適切な設定がされているか。
- ②3年間で系統立てたカリキュラムの計画及び実施
 - ・総合的な探究の時間及び学校設定科目を中心としたカリキュラムが展開できているか。
 - ・本事業の取組みの成果について、組織的に評価・分析・改善できているか。
- ③コンソーシアムの構築及び外部機関の有効活用
 - ・本事業における取組みの充実に資するコンソーシアムを構築できているか。
 - ・本事業の趣旨を踏まえ、事業実施計画に基づき外部機関の活用できているか。
- ④コーディネーターの有効活用
 - ・コーディネーターの校内での役割が明確化されているか。
 - ・コーディネーターを軸とする学校内外の協働体制が構築できているか。

(3) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校における事業の管理方法

I、校内組織の改編

現在、総合的な探究の時間の企画は、探究委員会を中心に行っているが、各学年や分掌と連携した取組みを系統的に実施できていない。そこで、各学年や分掌と連携し、本校の教育目標や本事業の目的・目標との関連を図りながら、カリキュラムの検討、コンソーシアムをはじめとした外部機関と連携した取組み等を企画・運営する新たな組織を設立する。

- ①普通科改革推進プロジェクトチーム（※）を経営会議の直轄組織として設置。
- ②プロジェクト会議を週1回程度実施し、本事業を企画・運営するとともに管理を行う。
（※）本事業の取組みの企画・実践・検証を行う。
管理職・教員・コーディネーターにより組織。

II、コンソーシアム運営委員会の開催

コンソーシアム運営委員会を年3回開催する。本委員会では、コンソーシアムを構成する機関が一同に会し、本事業で行う各取組みについて協議等を行い、もって本事業の取り組みの改善及び連携強化につなげる。

- ①カリキュラム及び取組み内容について、各専門分野からの助言
- ②コンソーシアムを構成する機関からの探究活動で活用できるリソース（施設・人材など）の情報交換
- ③探究活動に関するデータの提供、インターンシップ・フィールドワーク等の体験学習、海外交流校との交流等の機会の創出
- ④ICTを活用した新たな授業方法の検討、展開
- ⑤コンソーシアムを構成する複数の機関と学校とが連携する取組みの検討

III、学校運営協議会

学校運営協議会を年3回開催する。本委員会は市内中学校校長、学識経験者、PTA代表、公共機関代表等で構成。学校運営に関して校長に助言をおこなう機関として事業についても助言をおこなう。

- ①本事業における取組みに対する助言
- ②地域連携を含め、学校全体に関わる案件に対しての指導
- ③学校教育自己診断等における事業の分析

(4) 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

【管理機関における研究開発実績】

○スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業

〈期間〉平成 26 年度～平成 31 年度（指定 6 校、アソシエイト 1 校）

- ・北野「アジアと学び合う一夢を実現する国づくりー」
- ・三国丘「持続可能な地域開発に貢献できるリーダー育成プログラム」
- ・豊中「『多様性』と『文化』を掛け橋にして世界を牽引する人材を育成する」
- ・能勢「国際協力の現場で判断力と実践力を培うグローバル人材研究」
- ・千里「グローバル・マネジメント力を備えたリーダーの育成計画」
- ・泉北「共存共栄で持続可能なビジネスモデルを創造する次世代リーダーの育成」
- ・四條畷「環境にやさしいまちづくり」に貢献するグローバルリーダーの育成」

○スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）事業

〈期間〉平成 30 年度～令和 2 年度（指定 1 校）

- ・農芸：「学校、地域、社会のリソースを活用したチャレンジ精神豊かな地域創生ジェネラリストの育成～高付加価値化した商品開発と持続可能な開発のための教育実践～」

○ワールド・ワード・ラーニング（WWL）コンソーシアム構築支援事業

〈期間〉令和元年度～令和 3 年度（指定 1 校）

- ・北野：「いのち輝く未来を創造するイノベーティブなグローバル人材育成」

○スーパーサイエンスハイスクール（SSH）支援事業

〈期間〉平成 14 年度～現在（指定 11 校）

- ・天王寺：「多様で卓越した探究力を備えた科学技術人材の育成～持続可能なシステムの構築と普及～」
- ・住吉：「国際性豊かな科学技術人材の育成とカリキュラム開発及びその実践～変化の激しい時代をリードし世界に貢献する有為な人材の育成プログラム～」
- ・大手前：「科学する力を身につけたリーダー育成プログラム」
- ・高津：「グローバルな舞台で次世代を牽引する科学技術リーダーの育成プログラムの開発」
- ・三国丘：「予測困難な時代に活躍できる理工系人材育成プログラムの開発」
- ・生野：「学際的グローバルリーダーの育成」
- ・豊中：「“みらい地域還元型” 科学する人づくりプロジェクトの開発」
- ・千里：「VUCA の時代の課題に向き合い、国を超えて協働できる 科学技術人材育成プログラム」
- ・岸和田：「協創型『温故知新』プログラムによる科学技術人材の育成と地域と取り組む探究ネットワークの構築」
- ・四條畷：「社会に貢献できる科学技術系人材を育成する教育システムの深化と、地域への成果の普及」
- ・富田林：「併設型中高一貫校における『グローバル・サイエンスリーダー』の育成プログラムの開発・実践」

(5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
大阪公立大学 国際基幹教育機構 教授	西田 正宏	学識経験者
近畿大学 教授	柴 浩司	学識経験者 元大阪府教育委員会教育監
大阪大谷大学 教育学部 教職教育センター長	岩井 晃子	学識経験者
東京大学 大学院 教育学研究科 教授	牧野 篤	学識経験者
大阪狭山市公民館 館長	福田 準一	大阪狭山市立公民館 館長
大阪府国際交流財団 国際協力推進員	トラン ティ 美佳	JICA 関西 国際協力推進員

(6) 運営指導委員会が取り組む内容

年間３回程度の運営指導委員会において、本事業の取組みに対する各委員の専門性や多様な見地から、指導助言を行う。本事業における各取組みに関する進捗の確認はもとより、本事業を直接視察する機会等を設け、各取組みによる生徒の変容等について評価を行い、課題に対して必要な助言を行う。

また、探究の高度化をめざし、それぞれの専門性や知見を活かしながら、総合的な探究の時間や学校設定科目等において生徒個々の課題研究テーマに応じて指導を行う。

4 学際領域学科又は地域社会学科等における取組

- (1) 学際領域学科又は地域社会学科等におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添1「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）※教育課程表は添付資料として提出すること。

I、実践内容について

○1年次「深学探究」（基礎） …「総合的な探究の時間」1単位

生徒が自身の考えを育み、発信するために必要な思考・判断能力を育成する。コミュニケーション能力育成を目的とした「自己表現基礎」、自身の思考を深め表現力を養う「論理的表現基礎」の2つの課題を基に能動かつ協働的な学びを実践する。

- ①コミュニケーション能力育成のためのパーソナリティ分析等を行う「ソーシャルスキル育成講座」の実施。
- ②論理的思考力及び表現力（プレゼンやスピーチ能力）の向上に向けた「クリティカルシンキング育成講座」及び「校内ビブリオバトル」の実施。
- ③大学等と連携し、自己のキャリア形成のための課題の設定や情報収集及び分析の基礎を学び、生徒が居住する地域社会における課題について、情報収集し分析し、その課題の解決方法を提案する「深学探究基礎講座（仮称）」の実施。

○2年次「深学探究」（発展） …「総合的な探究の時間」2単位

1年次で培った能力を更に深化させることを目的とし、自身が最も関心がある地域社会の課題に対して自分事として解決しようとする意識を持つような探究活動をおこなう。

- ①大阪狭山市と連携し地域における教育・観光・行政・商業・医療等の課題について生徒個人が自由に課題を設定し研究、提言をおこなう「地域社会ゼミ（仮称）」を実施。
- ②韓国及びオーストラリア姉妹校とのオンライン交流及び短期交換留学による文化比較研究を行い、英語によるプレゼン発表を実施し、多様な国際的な課題の見方・考え方を養う。
- ③地元商工会や地域諸団体等と連携し、大阪狭山市における社会課題等について、直接関係者にインタビュー等を行う「フィールドワーク」の実施。

○3年次「深学探究」（完成） …「学校設定教科・科目」3単位

2年間における探究経験を基に、教科横断的探究活動を行うとともに、地域的な課題から国際的見地をもった課題解決を行うことができる資質・能力を育成する。

- ①2年次①の研究成果等についてポスターセッション、プレゼン発表を行う「地域社会研究発表会（仮称）」を開催。各学術分野における大学教員等が指導助言者として参加。また、体験型のプログラムも実施し地域の中学生や地元企業、地元住民等も参加。
- ②2年次までの各教科・科目での学習成果と、「地域社会ゼミ（仮称）」における探究活動の成果をより関連づけるため、「深学探究演習（仮称）」を実施。複数のタームと教科毎に特徴をもたせた探究授業を選択し受講する。自らの進路希望や興味・関心のある学問分野も含めて複数の演習を受講させることで学びの質を向上させ、生徒一人ひとりの論理的思考及び表現能力の完成を図る。
- ③また、生徒自らの研究成果を小論文として執筆、完成させる。論集にして以降の生徒に向けた資料として活用できるようにする。

(2) コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

現在の「総合的な探究の時間」では、大学や企業、大阪狭山市役所と連携し、課題解決型の探究活動を展開している一方で、探究する課題については、企業や市役所から提供された課題で探究活動を実施しており、生徒にとって課題が「自分ごと」となっていない。

また、課題を設定した上で、どのような見方・考え方で課題解決のための仮説を立てたり、情報を整理・分析したりするといった探究サイクルの過程について、その指導のノウハウや経験が不足している。こうした課題を解決するために、コンソーシアムを構築し、継続的かつより発展的な探究活動ができるよう、関係機関等と連携を行う。

さらに、令和4年度に大阪狭山市との連携協定を締結しており、地元自治体及び中学校、商工会との連携をさらに進めるために、連携協力体制を強化する。

I、探究活動の充実

課題の設定や情報収集及び分析の基礎を学習する機会を創出するため、コンソーシアムに大阪公立大学や近畿大学を加え、これらの大学から講師を招いた「深学探究基礎講座」を実施し、2年次において自ら課題を設定し、課題解決に向けた情報処理のスキルを向上させる。

II、地域との連携の充実

中学校と連携したICTの効果的な活用実践に加え、市役所や商工会等との連携を強化し、課題の発見や解決に向けた地元企業や施設等へのフィールドワーク等を行うとともに、地域の文化的行事への参加の拡大等を通じて、大阪狭山市と課題を共有するとともに、生徒自らが行う課題解決型の探究活動を市役所等と連携して行うことで、地域との連携を充実させる学校と市が一体となったコンソーシアムを構築する。

(3) コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
大阪公立大学	—	
近畿大学	—	
大阪狭山市	—	
大阪狭山市教育委員会	—	
大阪狭山市商工会	—	
一般社団法人 学びのイノベーション・プラットフォーム	—	
一般社団法人 ナレッジキャピタル	—	
株式会社 三菱総合研究所	—	

(4) 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
元大阪府教員	田中 秀憲

当該者の主な実績

大阪府において、教諭として 43 年間、本校を含む府立学校に勤務し、令和 5 年度末に再任用満了により退職した。

大阪狭山市を中心とした地域の公共団体との事業に携わってきた経験から、現在も、市役所や外部機関との連携の窓口となっている。校内のみならず、各諸団体からの信頼も厚い。

狭山池まつり実行委員会理事。

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

新たに組織改編する、普通科改革推進プロジェクトチームの一員として、以下のとおり、コーディネーター業務に取り組む。

I、勤務形態

非常勤職員として大阪府が雇用。週 2 回、1 日最大 6 時間勤務。

II、取組み内容

①コンソーシアムをはじめとした外部機関との連絡・調整

- ・本事業における各取組みを行う際の外部機関との連絡業務
- ・本事業担当教員と一緒に外部機関との取組みの実施時期等の打ち合わせ業務
- ・公文書の作成など各取組みにかかる事務的な依頼業務

②カリキュラム開発にかかる各取組みの調査・企画

- ・コンソーシアムを中心とした外部機関における本事業で活用できる人的・物的リソースの調査
- ・普通科改革推進プロジェクト会議において、カリキュラム開発における外部機関の人的・物的リソースの情報共有
- ・本事業における探究活動等の取組みの提案

③探究活動に関する生徒や教員等へのアンケート調査・分析

- ・本事業における各取組みに対する生徒・教員アンケートの作成
- ・本事業における生徒・教員アンケートの分析
- ・コンソーシアムを構成する外部機関の取組みに対するニーズ調査

(5) 学際領域学科又は地域社会学科等の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

新学科設置予定の令和8年度に向けて、以下の広報活動を令和6年度から順次実施する。

I、本校を志望する中学生及び地域の方に向けての説明

中学生やその保護者、中学校関係者、地域の方への告知及び説明については、以下の方法で周知に努める。

- ①学校パンフレットの作成、配布。その際には教育活動や行事等を整理し紹介。
- ②大阪府教育庁主催学校説明会「進学フェア」や府内の中学校が参加する「大阪南エリア 公立高等学校等合同説明会」及び近隣市町村中学校主催進路説明会等において、プレゼンによる説明を実施し、地域のみならず、大阪府全体に発信し周知していく。
- ③本校主催のオープンスクールにおいて、本校の新たなカリキュラム及び今後の流れについて説明する。
- ④特設 WEB ページの設置・公式 SNS 等を開設し、地域に向けて取組みを紹介する。

II、本校生徒・保護者への説明

本校生徒及びその保護者への告知及び説明については以下の方法で周知に努める。

①生徒

- ・令和6年4月 始業式における概要説明。（対象：全校生徒）
- ・令和6年4月 総合的な探究の時間において、地域行政機関及び大学等との連携の概要について説明する。
- ・令和6年8月 第2学期始業式において大阪府教育委員会会議の決定を報告する。
- ・以降随時、始業式や終業式、総合的な探究の時間において、情報提供を行う。

②学校運営協議会

- ・令和6年6月 令和6年度の学校運営協議会にて情報提供し、意見を聴取する。
開催予定（第1回：6月、第2回：11月、第3回：令和7年2月）

③保護者・PTA・後援会

- ・令和6年5月 PTA 実行委員会にて事業の説明を行う。
- ・令和6年5月 PTA 総会において事業の説明を行う。

④同窓会

- ・令和6年9月 同窓会長をはじめ委員に対し、事業の説明を行う。

5 実施計画

(1) 3ヶ年の実施計画の概要

I、令和6年度（1年目）

令和8年度の新学科開設に向けて、校内組織体制の改編をはじめ、コンソーシアムを構成する外部機関と連携協力体制の構築を中心に取り組む。

①校内組織体制の改編

⇒普通科改革推進プロジェクトチームを設置。

②コンソーシアムを構成する外部機関との連携協力体制の構築

⇒構想段階でのコンソーシアム構成機関と具体的な取組みの連携を検討。

③カリキュラム開発（先行実施）

⇒コンソーシアムを構築する外部機関と連携し、大阪狭山市の課題解決に向けた探究活動（成果発表会の実施含む）など、新学科の特色ある取組みの先行実施。

④他の本事業指定校への視察による取組み及びコンソーシアム構築等の研究

II、令和7年度（2年目）

令和8年度の新学科開設に向けて、育成したい資質・能力（主体性（課題設定力）・協働性（共創力）・探究性（批判的思考力）・社会性（グローバル意識））の向上をめざしたカリキュラム開発をはじめ、各取組みや新学科の趣旨等を学校外に対して情報発信する。

①カリキュラム開発

⇒1年目の取組みの成果と課題や、生徒のアンケート結果をふまえ、育成したい資質・能力を段階的にまとめたルーブリックを開発する。

②コンソーシアムを構成する外部機関との連携協力の強化

⇒1年目に計画した具体的な取組みの実施（施設設備の活用・講師派遣・研究室訪問等）

③広報活動

⇒学校HPの活用や地元自治体と連携し、地元中学生や地域の方々に対して、本事業の取組み等について広報する。

III、令和8年度（3年目）＊新学科

研究開発の最終年度として、1年目・2年目の取組みをプログラム化するとともに、本事業の成果を府内及び他府県に普及する。

①カリキュラム開発

⇒2年目で開発したルーブリックを活用し、育成したい資質・能力が生徒に身についたかどうかを検証する。

②広報活動

③本事業の普及

⇒「普通科探究発表会」を開催し、府立の普通科高校における生徒の探究成果の発表会を行い、取組みを普及するとともに、府内の普通科高校の探究活動を充実させる。

④「深学探究論集（仮称）」を編纂、生徒・地域教育機関に配付。

(2) 今年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	・普通科改革推進プロジェクトチームを設置 ・普通科改革推進 PT 会議 (事業全体の展開の確認、総合的な探究の時間の教材、年間計画等の検討)	・コンソーシアム構成予定機関との連携に係る協議
5月	・普通科改革推進 PT 会議 (先行実施の年間取組み計画及び教材作成等)	・コンソーシアム構成予定機関との連携に係る協議
6月	・普通科改革推進 PT 会議 (先行実施の年間取組み計画及び教材作成等) ・授業公開 (総合的な探究の時間含む)	・第1回コンソーシアム会議 (顔合わせ、授業視察、事業展開の確認・助言) ・第1回学校運営協議会 (事業展開の確認、助言)
7月	・普通科改革推進 PT 会議 (生徒アンケートの作成、教材開発等) ・「ソーシャルスキル育成講座」の実施 ・海外交流 (オーストラリア及び韓国の姉妹校) の実施	・第1回運営指導委員会 (顔合わせ、授業視察、事業展開の確認・助言) ・運営指導委員個別指導①
8月	・普通科改革推進 PT 会議 (事業の中間まとめ、後期の事業展開の確認、生徒アンケートの検討)	・フィールドワークに向けた地域関係者及びカリキュラムアドバイザーとの意見交換 ・コーディネーター研修 (東京)
9月	・普通科改革推進 PT 会議 (事業の中間まとめ、後期の事業展開の確認、生徒アンケートの実施・分析)	

1 0 月	・普通科改革推進 PT 会議 (探究活動中間発表会の企画) ・オンライン交流 (韓国) ・他府県の新学科先行実施校の視察	・第2回コンソーシアム会議 (他府県視察の報告、連携協力体制の確認、事業展開の確認、助言) ・教員向け研修①
1 1 月	・普通科改革推進 PT 会議 (新学科カリキュラムの検討) ・「深学探究基礎講座」の実施 ・探究活動中間発表会の実施 ・地元「フィールドワーク」の実施	・第2回運営指導委員会 (事業の中間報告、発表会での指導・助言、後期の事業展開の確認・助言) ・運営指導委員個別指導② ・第2回学校運営協議会 (事業の中間報告、助言) ・関係機関との連携による先行実施
1 2 月	・普通科改革推進 PT 会議 (新学科カリキュラムの検討) ・外部識者による特別講義 (生徒対象)	・教員向け研修②
1 月	・普通科改革推進 PT 会議 (探究活動発表会の企画、新学科カリキュラムの検討)	・全国フォーラム・コーディネーター研修 (東京)
2 月	・普通科改革推進 PT 会議 (生徒アンケート実施・分析、次年度事業展開の計画)	・第3回コンソーシアム会議 (事業報告及び次年度事業計画の確認、助言) ・第3回学校運営協議会 (事業報告及び次年度事業計画の確認、助言)
3 月	・普通科改革推進 PT 会議 (今年度の事業総括、次年度事業展開の確認) ・探究活動成果発表会の実施 ・成果発表会 特別講演 (生徒対象)	・第3回運営指導委員会 (事業報告、発表会の指導・助言、次年度事業計画の確認・助言) ・運営指導委員個別指導③ ・関係機関との連携による先行実施 ・運営指導委員個別指導④

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの方、目標指標の設定は別添２「目標設定シート」に記載。）

事業の進捗状況の確認及び改善の仕組みについて、校内においては、普通科改革推進プロジェクトチームを中心に生徒の意識変容に関するアンケートを実施し、事業の進捗状況を確認する。また、外部の評価及び改善の提言については、運営指導委員会やコンソーシアム運営委員会の有識者から指導助言をもらうこと等により、事業の進捗確認を行う。

I、普通科改革推進プロジェクトチーム

- ・定期的に開催するプロジェクト会議において、生徒の意識変容を見取るアンケート調査項目を検討・作成（１年目）
- ・アンケート調査を２学期当初に実施し、その数値を分析するとともに、年度末に同じアンケートを行い、生徒の意識変容を確認する。
- ・確認した生徒の意識変容の結果について、プロジェクトチーム以外のすべての教員に周知し、本事業の成果と課題を共有すると共に、生徒の意識変容の更なる向上のための具体的取組みについて教員研修を実施する。
- ・２年目以降は、前年度のアンケート調査項目を精査し、各取組みの成果と課題を踏まえ、目標設定シートに記載した項目以外の生徒意識の変容等についても把握できるものとし、アンケートを実施する。
- ・各取組みの進捗状況等については、運営指導委員会やコンソーシアム運営委員会において報告する。

II、教科探究委員会

- ・総合的な探究の時間の取組みを企画する教科探究委員会を、週に１回程度開催する。
- ・カリキュラム構築指導アドバイザーを招き、地域と連携した探究活動やフィールドワーク等の探究活動における効果的な実践について、企画する。
- ・実践の振り返りやルーブリック等による評価について、カリキュラム構築指導アドバイザーの指導助言を踏まえ、検討・開発する。
- ・学校設定科目「深学探究（完成）」（仮称）の年間の指導と評価の計画を検討・策定する。

III、運営指導委員会及びコンソーシアム運営委員会

- ・定期的に開催するそれぞれの運営委員会において、上記プロジェクトチームで作成したアンケート項目が適切なものとなっているかについて指導助言を行う。
- ・アンケート結果の分析を確認し、各取組みの進捗状況を把握するとともに、取組みの改善に向けた指導助言を行う。
- ・運営委員会とは別に、学校に訪問して直接取組みを視察する機会や、オンラインを活用した取組みの進捗確認を行う。

6 成果の普及のための仕組み

本事業の成果については、次のとおり、他の府立高校をはじめとした他府県の高校、地域の中学校及び地域の方々に対しても積極的に情報発信を行うことにより、成果を普及する。

- ①本事業及び新学科設立に係る特設サイトを開設し、他の府立高校に対して普通科の特色・魅力ある取組みについて情報発信する。
- ②探究活動の公開に特化した「探究 SNS」を開設し、他の府立高校はもとより、地域の中学生・行政機関等も探究活動の情報を得ることができるようにする。
- ③大阪狭山市文化会館「SAYAKA（さやか）ホール」で実施予定の校内発表会について、府内はもとより、地域や他府県にも公開、周知する。
- ④指定3年目に「普通科探究発表会」を教育庁及び本事業申請校と共催し、府立の普通科高校における生徒の探究成果の発表会を行い、取組みを普及とともに、府内の普通科高校の探究活動を充実させる。
- ⑤教育庁主催の府内公私全ての担当教員が参加する教育課程協議会「総合的な探究の時間」部会における発表を行い、取組みを普及する。
- ⑥本事業の取組み及び各取組みにおける評価、成果をまとめた研究報告書を作成し、府立高校に配付し取組みを普及する。

7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

I、本事業の継続的連携をおこなう組織体制の構築

地域社会学科の特色ある学びを継続するためには、コンソーシアムを構成する関係機関等との連携を継続していく必要がある。また、事業において開発したカリキュラムや、活動の記録及び成果を基にした教材プログラムを作成し、校内での取組み実施を持続可能な形にする。

- ①国の指定期間内のコンソーシアムを中心とした連携機関との連携協定の締結
- ②探究学習活動の教材プログラムの作成
- ③国または府の教員加配の有効活用
- ④大阪教育ゆめ基金を活用した探究活動等に対する支援体制の構築

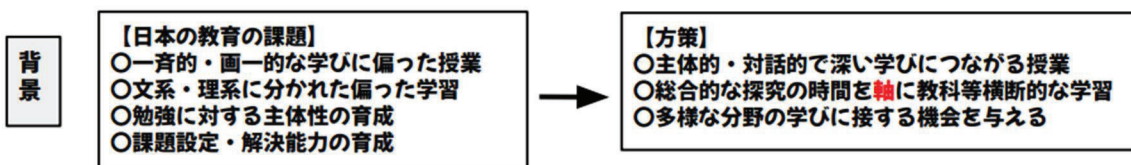
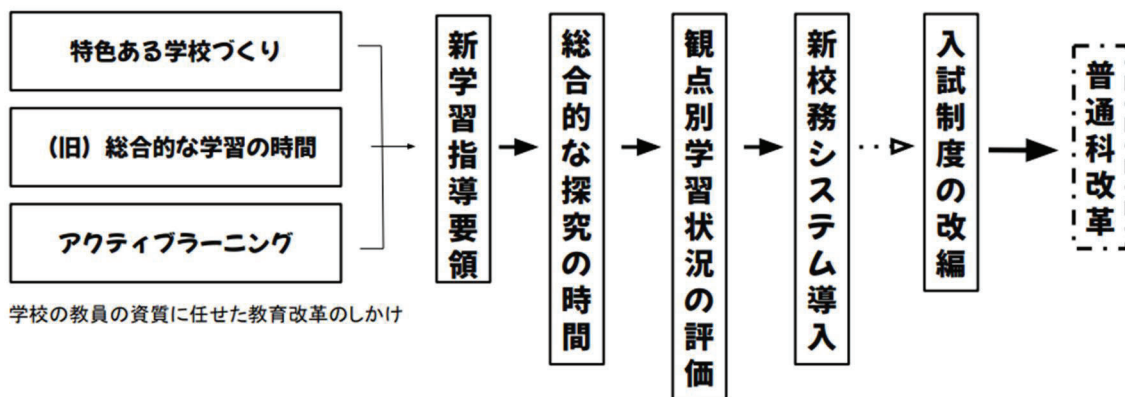
II、指定終了後の取組継続について

- ①大阪府の「府立高等学校再編整備計画」に基づき、令和8年度より新学科を設置予定。②再編整備に係る大阪府の予算を活用し、コーディネーターの人件費や探究活動に係る費用等を確保し、指定終了後も、取組を継続。

Ⅱ 普通科改編に向けた教員向け研修について

新たな普通科への改編に向けて、現在の探究活動から更なる内容の充実をめざし、年度当初より普通科改革プロジェクトチームを発足。検討内容を学校全体に共有することを目的として、大阪府教育庁担当者と連携し複数回の教員研修を実施し、理解を深めた。また、オープン会議として自由に教員が参加する会議を設定し、方向性や目標設定に努めた。

令和6年12月研修会資料



改革の主な内容は**新学科の設立**

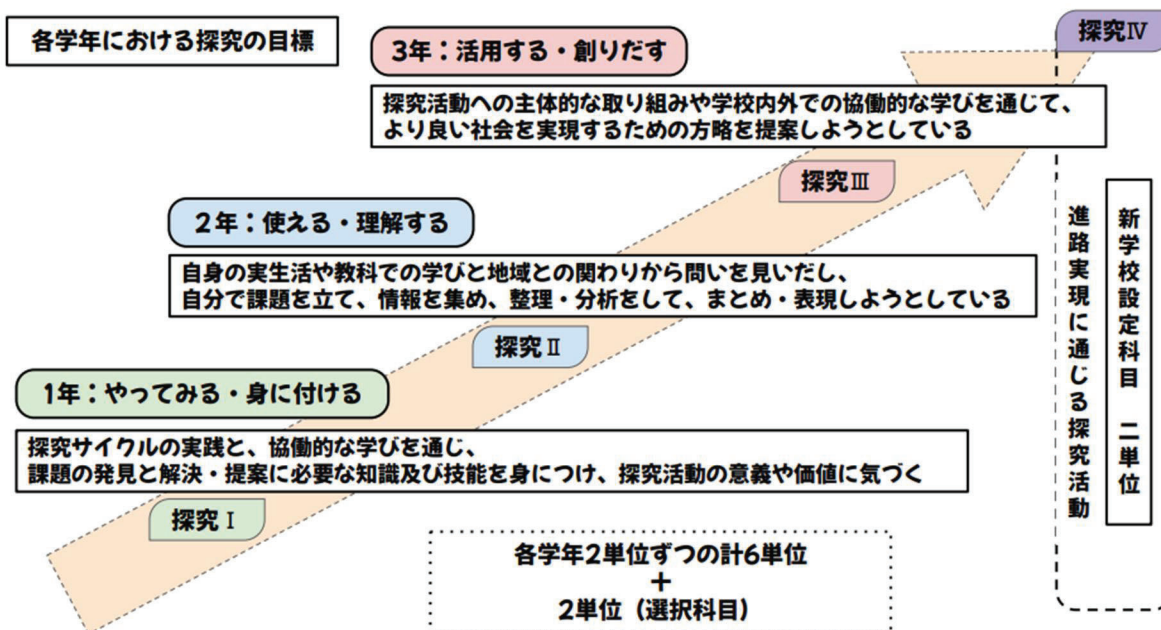
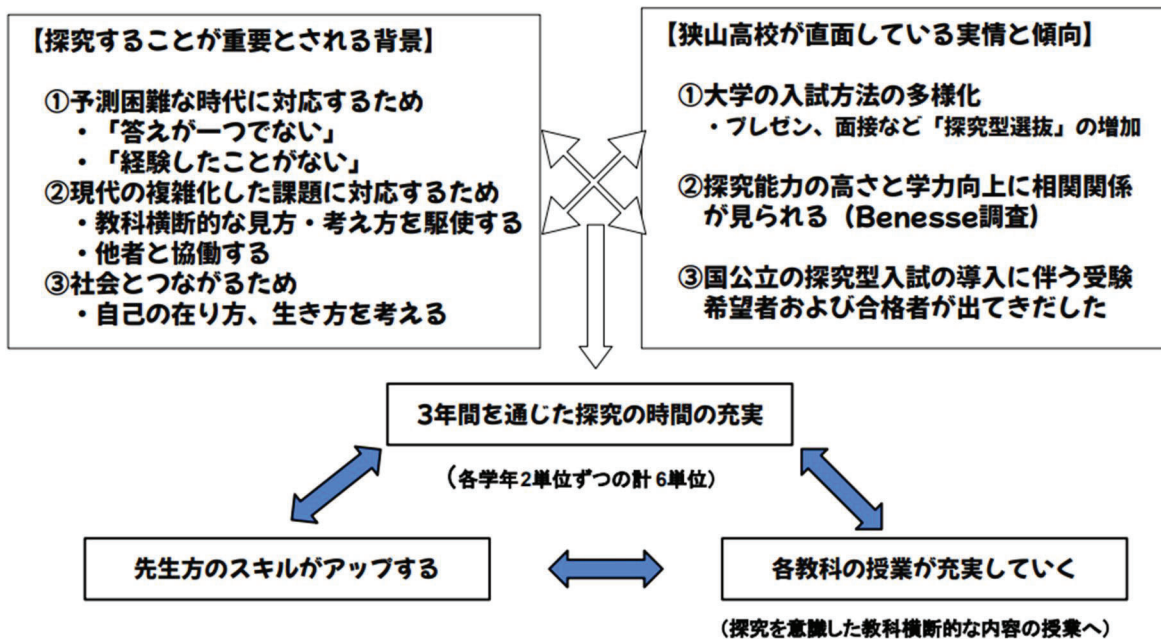
- ①学際領域学科:SDGsの実現やSociety5.0の到来に伴う諸課題に対応するための学際的・複合的な学問分野や新たな学問領域に即した最先端の特色・魅力ある学びに取り組む学科
- ②地域社会学科:地元自治体を中心とする**地域社会が抱える諸課題に対応し**、社会の将来を担う人材の育成を図るために、**地域社会が有する課題や魅力に着手した学び**に取り組む学科
- ③その他 :スクール・ミッションに基づく特色・魅力ある学びに取り組む学科

ここが合致！！

普通科改革研究校に

狭山高校のスクールポリシー

校訓「自主・創造・連帯」のもと、「跳べよ遙か狭山生」をキャッチフレーズとして、グローバルセンスを兼ねそなえ、高いコミュニケーション能力（リーダーシップ・フォロワーシップ）や心優しい人間性をもって、**地域社会においてパートナーシップを構築しけん引する「自主創造型グローバル・リーダー」を育成する。**



「総合的な探究の時間」及び学校設定科目を3年間で6単位実施、更に選択科目「探究Ⅳ（仮称）」を設定し生徒の主体性を育み、自身で問い立て課題解決する能力を育成することを共有するとともに、教科学習においても教科横断的な内容の授業を実践するための研修を行う。

Ⅲ 新学科における教育課程の編成について

1. 現状と課題

新学科の設置に伴い、教育課程の改訂を進めた。生徒が主体的に学ぶ機会を増やし、進路実現に向けて支援することを目的に、単位数の増加や探究に関する学校設定科目の開設等について検討した。本報告書では、教育課程編成の経緯とその内容について報告する。

2. 教育課程編成の経緯

(1) 普通科改革プロジェクトチームによる素案の作成

普通科改革プロジェクトチーム（以下「PT」という。）が本校の教育目標および進路指導方針に基づき、教育課程の素案を作成した。ここでは、単位数の増加及び探究に関する科目の学年配置、各教科のバランスを考慮しながら基本案を策定した。

(2) 教科主任会議での協議

作成した素案を教科主任会議で検討し、各教科の専門的な視点から意見を募った。特に、単位数の増加に伴う生徒の負担や部活動時間の確保、授業内容の充実度などについて議論が交わされた。

(3) 意見の取りまとめと調整

教科主任からの意見を反映し、PT で調整を行った。単位数の増加については、学習時間の確保と外部からの評価を考慮しつつも、生徒の負担を最小限に抑える方法を検討している。現在も調整を継続し、より良い形を模索しているところである。

3. 教育課程の主な変更点（検討中）

(1) 単位数の増加

現在の学習量を維持し、進学に向けた基礎学力を身につけさせるため、週あたりの単位数を1単位増加させる方向で検討した。授業時間の増加により生徒の負担が増加し、部活動時間が削られる懸念もあるが、現教育課程と同水準の教育活動を確保するため単位数の増加を決定した。（31単位→32単位）

(2) 「総合的な探究の時間」の学年配置

生徒が主体的に学ぶ機会を増やすため、各学年に探究に関する科目を2単位ずつ設置する方向で検討を進めている。これらの科目において、生徒が自ら課題を設定し、調査・考察・発表を行う活動を実施し、思考力・判断力・表現力の向上をめざす。

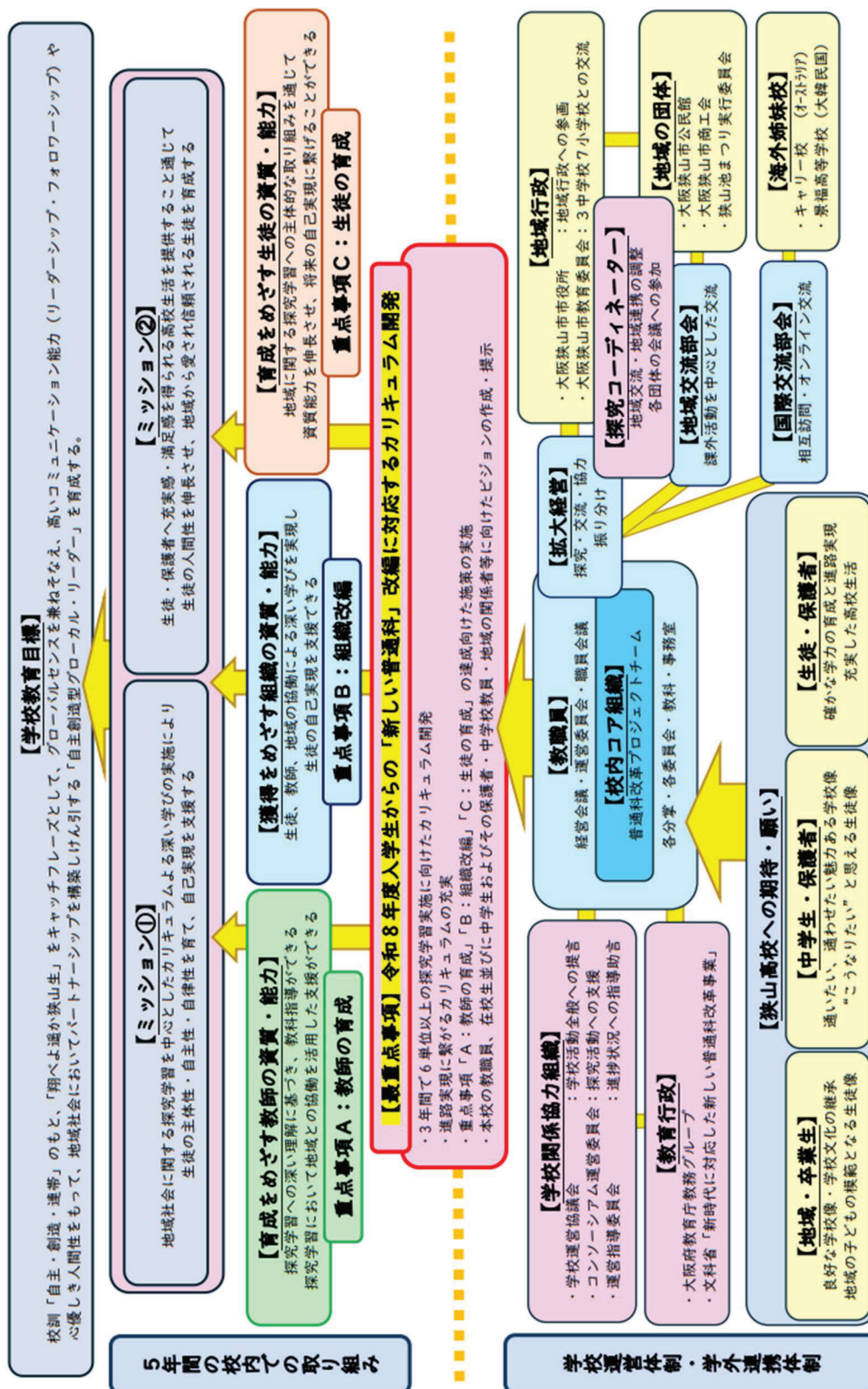
(3) 進路指導方針に基づく教育課程の改訂

前述(2)に加えて、本校の進路指導方針に則り、国公立大学・私立大学・専門学校など本校生徒の志望する多様な進路に対応できるカリキュラムへの見直しを進めている。特に、基礎学力向上を目的とした科目配置や、専門科目における重点的な学習について議論を進めている。

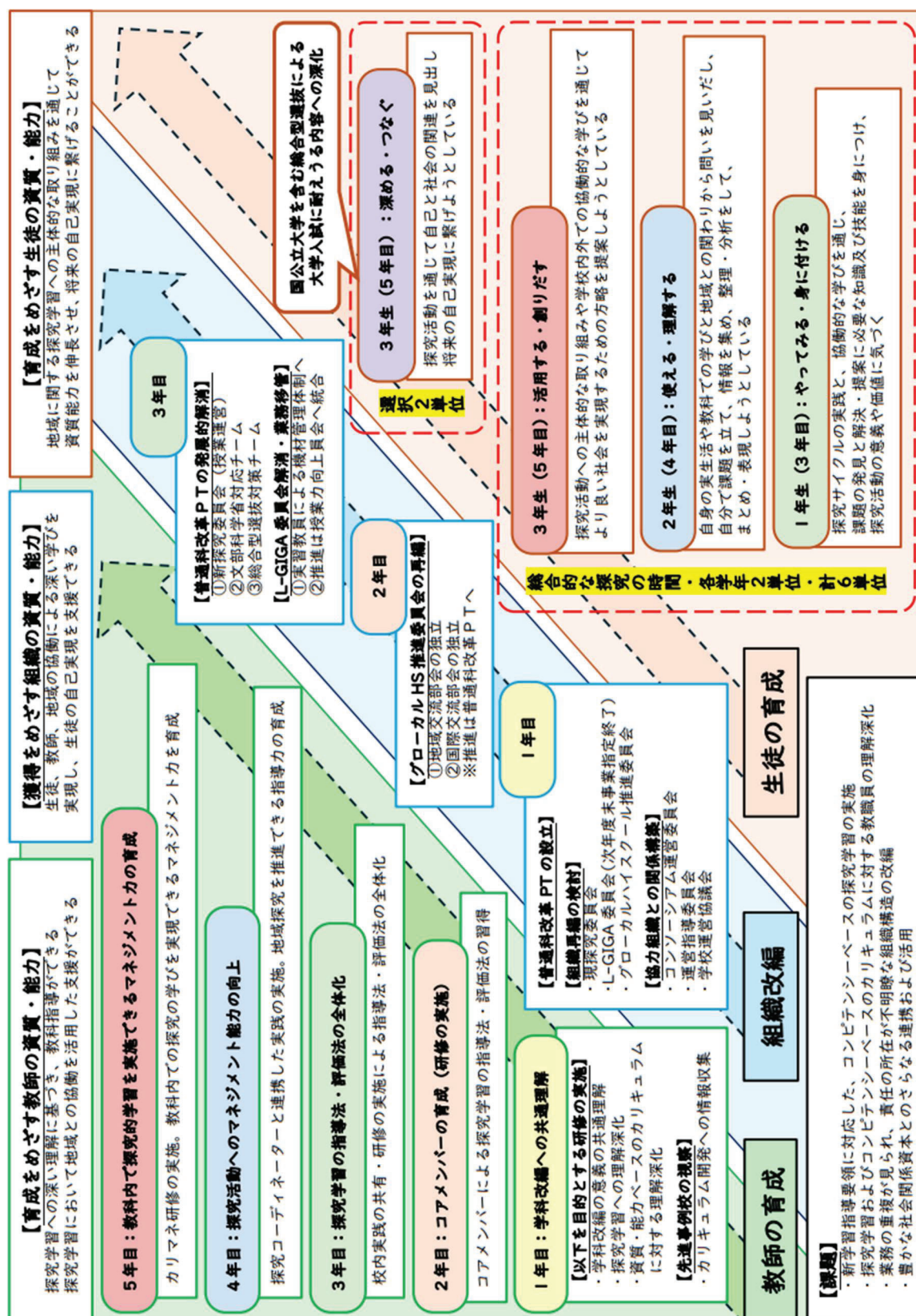
普通科改革 カリキュラム編成 (案)																																	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
1 年	英コミュⅠ ③			英演Ⅰ ②			体育 ③	保健 ①	現代の 国語②			言語 文化③			歴史 総合②		数学Ⅰ ③		数学A ②		化学 基礎②		生物 基礎②		芸術Ⅰ ②		情報 ②		探究Ⅰ ②			HR	
2 年理	英コミュⅡ ③			英演Ⅱ ②			体育 ②	保健 ①	数学Ⅱ ④		公共 ②	地理 総合②		家庭 基礎②		論理 国語②		古典 探究②		化学 ②		物理基礎 or 生物③		2 選択 ②		探究Ⅱ ②						HR	
2 年文	英コミュⅡ ③			英演Ⅱ ②			体育 ②	保健 ①	数学Ⅱ ④		公共 ②	地理 総合②		家庭 基礎②		論理 国語②		古典 探究②		文学 国語②		日探 or 世探③		2 選択 ②		探究Ⅱ ②						HR	
	令和 7 年 教育委員会提出予定																																
3 年理Ⅰ	英コミュⅢ ④			英演Ⅲ ②			体育 ②	政治・ 経済②	論理 国語②		古典 探究②	物理④ or 生物② 地基礎②			数Ⅲ ④		化学 ③		数C ②		A選択 ②		探究Ⅲ ②								HR		
3 年理Ⅱ	英コミュⅢ ④			英演Ⅲ ②			体育 ②	政治・ 経済②	論理 国語③		古典 探究③	物理④ or 生物② 地基礎②			数学演 習B②		化学 ③		B選択 ②		A選択 ②		探究Ⅲ ②								HR		
3 年文	英コミュⅢ ④			英演Ⅲ ②			体育 ②	政治・ 経済②	論理 国語③		古典 探究③	地学 基礎②		日/世/地 ④		C選択 ③		B選択 ②		A選択 ②		探究Ⅲ ②									HR		
2 年 2 単位選択	実践国語演習、数学B、数学ⅠA演習、長文演習Ⅰ、音楽演習、美術演習、書道演習																																
3 年 A選択②	数学演習A（理Ⅰのみ）、数学演習B（文のみ）、音楽演習 3、美術演習 3、実用書、総合家庭、探究Ⅳ																																
3 年 B選択②	古典演習（文のみ）、数学C、化学基礎演習、生物基礎演習、ライフスポーツ、音楽演習 3、美術演習 3、実用書																																
3 年 C選択③	公民特講、長文演習Ⅱ、保育音楽、書道特講、美術特講、生活文化																																

Ⅳ 新教育課程の実施に向けたグランドデザインの策定

令和8年度入学生に向け、普通科改革プロジェクトチームにおいてグランドデザインの検討を始め、本校の学校教育目標の実現に向けたミッションを設定。学校運営体制、学外の関係機関との連携体制を踏まえた3つの重点事項を設定しグランドデザインを策定した。



グラウンドデザインにおける重点事項A・B・Cを踏まえ、本校がめざす生徒像・教員像・組織改編について図式化し、12月の職員会議において教員に共有した。また1月コンソーシアム会議及び運営指導委員会において提示、様々なご意見・ご指摘をいただいた。



V 先進校視察報告

本校の取組と共通性を持つ同事業先進校へ視察を行った。日程、視察校、視察担当は以下の通りである。

本年度は、以下の観点において視察をおこなった。

- ・ コーディネーターの活用について
- ・ 学校独自の探究学習の実践方法について（特に実施する組織体制について）
- ・ 教員への周知と研修について

① 兵庫県立柏原高等学校 地域科学探究科（本校教頭・府立東百舌鳥高等学校首席・同教諭）

日 程：令和6年10月23日（水曜日）

内 容：探究授業視察・情報交換

所 感：

事業を進めるにあたって、組織的に授業展開を検討することの重要性を感じた。

また、本校においても、教員の個人の能力に依存することなく、全ての教員が実践できるような指導のパッケージ化の検討が急務であると考ええる。加えて、「教科横断型」という形式にとらわれることなく、生徒が独自に問いを立て、探究する授業作りをおこなっている点について参考となった。

② 浜松学芸高等学校 探究創造科 地域創造コース（本校教諭2名）

日 程：令和6年10月25日（金曜日）

内 容：授業視察及び意見交換

所 感：

生徒が堂々と自分の意見を発言することができており、上級生になるほどその力が顕著に見られたため、探究のプログラムに組み込まれている「発信力の強化」・「失敗に強くなる」の目的がうまく実効しているように感じた。

現在、在学中の生徒は、先輩の影響、地域創造コースの活動内容に魅力を感じ進路決定をしている。そのため、探究活動を目的に入学しており、探究活動への意欲が高い。

③ 福岡県立八幡高等学校 文理共創科（本校教諭3名）

日 程：令和6年10月29日（火曜日）

内 容：「知の追究」授業視察・情報交換

所 感：

本校と異なり、コーディネーターの役割が大きいと感じた。（コーディネーターが常勤であることによる授業の企画運営、教員同士の相談体制が充実していることに加え、生徒が直接相談できることが大きなメリット。）

元々教員の有志が探究的な学びを進め、全体に広がっていったので、教員の探究に対する認識も違うと感じた。本校における教員への周知と研修体制が必要であると考ええる。

④ 京都市立開建高等学校 ルミノベーション科（本校首席・府立東百舌鳥高等学校首席・同教諭）

日 程：令和 6 年 11 月 22 日（金曜日）

内 容：探究中間発表会

所 感：

多様な多人数指導の形態（原則、3 名による授業）が本来の探究学習の概念を覆す取り組みであると感じた。

教員間の協働的な学びによって生徒への指導も大きく変化し、良いサイクルとなっている点について本校においても教員の探究に対する学びを深めていくことが必要であると感じた。

⑤ 伊丹市立伊丹高等学校

日 程：令和 7 年 2 月 1 日（土曜日） 本校教諭 1 名

内 容：伊丹探究フォーラム参加

詳 細：

R4. 5. 6 の学科設置にかかる準備期間中に外部連携先を 2 → 5 団体へと増やしていき、R7 から新学科、グローバル共創科としてスタート。普通科 4 クラスとグローバル共創科 1 クラスの構成で、学校設定科目「共創」を 1 年 1 単位、2 年 2 単位総合的な探究の時間を各学年 1 単位、合計 6 単位配置している。

グローバル共創科における選択では、研究したい内容が明確になっている生徒だけが選択できる仕組。

1 年はグループ探究、2 年は個人探究、3 年は自由選択となっており、3 年次のフィールドワークによるインタビューや実地調査で、外国人をターゲットにし、英語力も養う。

Canva というプレゼンテーションソフトを自由に使えるようにしている。

指導方法としては完璧をめざさないことを意識しており、生徒には「本当にこれでいいのかなあ？」と投げかけ繰り返すことを大切にしている。

課題としては、教科での学びと探究の時間の学びが繋がっていないことをあげられていた。

視察を踏まえた今後の方向性

視察した学校では、学年ごと、単元ごとに全ての教員が指導可能な環境にするための「パッケージ化」が視察した学校の共通する点であった。実施した際に効果が低かったテーマなどは次年度より入れ替える、良かったテーマはブラッシュアップして継続するなど柔軟な運用について参考となった。

コーディネーターの活用について、視察校においては、授業の入り込みや、実際の授業に企画立案等も含め、多様な業務を担っている。本校においてコーディネーターの相応しい活用について検討することが急務である。更に、事業終了後においてコーディネーターを継続して任用していくための仕組を管理団体と検討することも必要である。

VI コーディネーター 令和6年度 活動報告

・地域連携コーディネーター 報告

7月2日オンライン研修⑥「未来の兆しをみつける」

課題：「①あなたの身の回りで、十年後に変わっているコトやモノを説明してください。②上記の変化が起こるとしたときに、弊害になることはありますか。あれば挙げてください。③上記の変化にあなたが関わるときに、どんなことをしますか」

- ① 多様性がさらに進む社会となっている。温暖化や災害等などから引き起こされる困難さが増え、ますますひどくなっている。その状況に対して社会全体として、違いや多様性を認め合い助け合いや協働をベースとして取り組まないといけないぐらい地球が厳しい状況になっている。格差や分断を生む価値観では回っていかない社会になっている。
- ② ①のような状況になったとしても既得権益や格差を守ろうとする価値観との対立・分断が起こる可能性がある。自分（自国）ファースト的な価値観。力（暴力・武力）による解決。
- ③ 教育現場での取り組みが重要になってくる。児童・生徒が主体となり、自由に開かれた学校。まずは一人一人（自分も周りも）を大切に、一定の価値観を押し付けることなく、個性や多様性を尊重する優しい教育。身近な（家族・友人・地域など）ことからルール作りや課題解決を経験することを積み重ね、社会全体・地球規模の課題解決へ繋げ、発展していく。学習（知識の獲得）が自分も含め人や社会（地球）に還元していくことを実感する。時間はかかりますが、子どもたちの手の届く小さな課題から取り組んでいくしかないと思います。

8月8・9日対面研修④「プロジェクトデザイン」「ワークショップデザイン」

課題：①ワークショップとは何でしょう②高校 CN にとって、ワークショップデザインの知識・技能・哲学を学ぶことは、どのように社会に寄与すると考えますか？

- ① 共同で、到達目標を設定し、真の目的を明確にする場。そのために参加者がお互いに双方向的な学びや体験を創る。参加者の円滑なコミュニケーションを形成するためにアイスブレイクやゲームなどを適宜活用する。スタッフは日時・場所・陣形・準備物など事前に丁寧な準備が必要。
- ② プロジェクトを達成するために地域・社会と協働することに寄与する。

8月30日オンライン研修⑦「STEAM教育のあり方」

課題：自校において実践している方：STEAM教育の改善案または新たな提案を考えてください。まだ実践していない方：これから実施しようとするSTEAM教育の案を考えてください。

・自分自身が今までSTEAM教育として実践してはいみせんでしたが、狭山池に関しての様々な取り組みが、今後も教科横断的な学びやSTEAM教育に繋がっていくのかな？と思いました。例えば、歴史・伝承などは社会科・国語科、クリーンアクションでのゴミ・水質・環境などは理科・数学、池堤でのランニング・ウォーキングなどは保健体育科、桜の状況・市民の憩いの場など全般的なことは情報科も含め全教科、そして龍神伝説などの民話には芸術科（アート）も繋がってきます。整理して今後の取り組みにいかしていく。

9月30日オンライン研修⑧『「生徒指導提要（改訂版）」が示すこれからの生徒指導の方向性—チームで支える生徒指導の推進—』

課題：生徒指導は、学校の中だけで完結するものではなく、家庭や地域及び関係機関等との連携・協働に基づき、児童生徒の成長・発達を支えるという広い視野から地域全体で取り組む「社会に開かれた生徒指導」として推進を図ることが重要です。そのためには、域学校協働活動（「学校を核とした地域づくり」）等の一層の充実が求められます。具体的な取り組みとして、どのようなことが考えられるのか、また、そのなかで、皆さん高校コーディネーターが果たすべき役割とはどのようなものなのか、考えてみましょう。

・現勤務校での生徒指導は提要に示されている方向性と同じだと思います。今の生徒たちを前にすると自然とその方向でないとうまくいかないのではないのでしょうか。ただ、学校現場だけで解決できないことが多々あるように思います。保護者だけでなく学校を取り巻く社会の難しさ（責任、価値観の多様化など）が、年々増加していると感じています。だからこそ、学校だけの生徒指導では立ちゆかないと思います。答えはわかっていませんが、まずは地域の方々に生徒（学校）を知ってもらい、お互いが主体となって協働して新しい何か形になるものを創っていきたいと思います。そのためには生徒も教員も校外に出ていく、逆に積極的に校内に来てもらう。そのようなことを生徒と教員で企画していきたい。

10月30日対面研修⑤「システム思考とデザイン思考」

課題：今回のビジョンづくりからプロジェクトづくりの方法を学んだ上で、今年度策定した、ご自身のプロジェクトを振り返り、改善点やプロジェクト推進策を記述してください。

・まず、一人の力ではプロジェクトの推進もできないし、多くの教職員や地域の方の理解・協力を得られないと強く思いました。職場・地域を振り返ると、一緒にプロジェクトに関係していただける方が複数いることを改めて確認しました。認識はしていましたが、積極的に協力を求めていなかったと思います。今回の研修を通して、プロジェクト進行には理解のある方との協働が絶対に必要だと思いました。また、教職員・地域の方と話をすること、自らのテーマに関して積極的にコミュニケーションを取り、現状の認識を共有しながら話をし、課題や改善点を出していただき、何を目標・目的にしていくかを再度確認していきたいです。学校と地域との連携のあり方を探りながら、お互いの課題と多くの方との協働を模索していきたいです。12月末に予定されている地域の多くの方が参加する取り組みがあります。それに向けて多くの生徒が主体となって、教職員も含めて地域の方と協働できる場を作っていくことを進めています。その取り組みの過程で地域・教職員・生徒としっかりコミュニケーションを取り、協働することがプロジェクトの推進につながると思います。自らのプロジェクトに関係する教職員研修を実施したいです。今回の対面研修で純心高校の報告から、教職員研修の重要性を確認しました。あきらめではないですが、全体に対して後ろ向きな感じを持っていましたが、研修機会はプロジェクト推進のためには必要です。最初は教職員だけで、内容・テーマも取り組みやすいことから始めます。積み上げていければ、地域、保護者、卒業生、生徒なども参加できる研修としていきたいです。まずは最初の一步を自分だけでなく、協力いただける方と計画します。

11月14日オンライン研修⑨「地域学校魅力化論」

課題：地域と学校の双方が魅力的になるために、自校でどのような取り組みが可能か。

・本校は創立以来大阪狭山市で唯一の府立高校であります。このことが行政を含め、市民の方にとって学校への関心が高いという面があります。一方、市民だけではなく他市町村から来ている生徒・教職員も多くいます。地域のことをあまり深く認識していないことが課題としてあります。そのような状況ですが、従来から様々な地域連携活動を行ってきました。行政とはもちろんですが、探究活動や授業、生徒会活動、部活動、ボランティア活動等で、地域資源を活用し、赤ちゃん（妊婦さん）からお年寄りまですべての年代の方とともに協働してきました。その活動を通じて、学校（多くの生徒・教職員）としてともに学びを深め、成長してきました。また、地域で評価されることが多く、学校として活動に対して抵抗なく協力する意識・姿勢ができています。このような活動は継続しつつ、大阪狭山市（歴史・文化・生活など）をより深く理解することに取り組んでいきたいと思っています。地域を知ることによって価値観などもわかり、大切なものや課題なども見えてきて、「地域にとっての学校とは」「学校にとっての地域とは」、お互いが必要とする協働に繋がるのではないかと思います。地域・学校（生徒・教職員）にとっての深い学び・成長なると思っています。地域資源として、博物館を活用していきたいです。館内での展示物・視聴覚教材をはじめ、学芸員の講話・フィールドワークなど、探究活動で生徒・教職員が学び、考えることができます。また、行政と協働し、探究活動で「街づくり」をテーマに問題点や課題に切り込むことが地域・学校にとっての深い学び・成長に繋がります。その他公民館・商工会なども活用していきたいです。地域との協働で多様性に触れることで、学校（生徒・教職員）の価値観の変化、従来の学校からの変化も期待できると思います。地域にとって何が必要で課題は何か、見えにくい面もあります。CNとしては様々な方との丁寧・本音でのコミュニケーション・交流をすることが重要です。

12月3日オンライン研修⑩「学校と企業の持続的関係性の構築」の事前課題

事前課題シート① | 関係性の深さ

企業と高校の関係性の深さ

右図のように4つの段階で関係性の深さを表現しています。

上にいけば行くほど、関係性が深まりますが、難易度が高くなっていくイメージです。

担当しているもしくは関わっている高校と企業の関係性を上の図の4つのうちから一つ選んでみましょう。またその理由も記入してください。

関係性の深さ： 垂直的關係 ・ 水平的關係 ・ 協働的關係 ・ 持続的關係

関係の深さは垂直的關係です。

その理由：商工会とは以前から交流はあるのですが、商工祭など主催のイベントに参加や運営に協力しているレベルです。また、単発で探究の時間で企業の商品開発を考え、まとめて発表したことはあります。企業に就職する生徒がほとんどないということもあり、組織的な関係がある企業はありません。全体で必要性やメリットについて考えてなく、論じたことはいません。

事前課題シート① | 関係の状態

連携のテーマや目的、協力してくれている企業の目論見など現状を把握するとともに、関係性をさらに深めるための課題・壁について考察してみましょう

項目	内容	備考
学校にとって企業と連携・協働する目的は何か？ どんな目的で企業の協力を得ているのか？	地域とは違った、学校にはない視点に接することができる。学校の発展が必要とする活動ではないことに気付くことができる。企業ならではのことも知り、何ができるかを考えることは有意義。ただ、企業にとって利益を得るうえで、学校に必要なのは何か？、今のところはわかっていません。考えていなかったものでこれからの課題だと思います。	
協力してくれている企業の目論見や動機は何か？	コンソーシアムにも商工会の代表が入っていますので、今後企業との連携・協働を丁寧に進めていきたい。	
今後、高校と企業が関係性をより深めるための課題や壁は何か？	お互いのメリットは何か？学校には協働することで有益なことはあると思いますが、企業にとって商品に繋がるといった学校との協働には何か？製品に対しての意見や共同での商品開発などに学校(高校側)は魅力的か？魅力的な取り組みに発展していかないといけないと思います。	

2月3日対面研修⑥「プロジェクトの成果」プロジェクトの成果について

令和8年度よりスタートする（仮称）地域社会学科に向けての準備・試行（探究）

プロジェクトの成果についてまとめる

令和8年度よりスタートする（仮称）地域社会学科に向けての準備・試行（探究）

1. 計画

目的：毎年4月末に行われる狭山池まつりへの主体的な参画を目指す。

目標：毎月1回行われている狭山池クリーンアクションへの多数の生徒参加。

12月末のスペシャルバージョンに200名以上の生徒参加。

清掃活動を通して地域の方々とのコミュニケーションをさらに深め、連携協働して、その積み上げを狭山池まつりに繋げる。

仮説：狭山池まつり実行委員会に生徒が参加し、主体的に龍神舞台の準備・運営および舞台周りの活用などの企画を提案する。

仮説の前提：生徒会役員、部活生徒、ボランティア生徒が清掃活動やまつりに参加してきた今までの経験実績があり、地域から一定の評価を得ている。

2. アクション

- ・12月末の狭山池クリーンアクションスペシャルバージョンへの参加

生徒会役員を中心として生徒主体で参加の呼びかけ。

毎月のクリーンアクションおよびスペシャルバージョンに向けて考える。

ポスター作成や全校集会やクラスでPR。部長会議で連絡（部活単位での参加）。

SNSを使つての参加申し込み、人数確認等々。

当日は生徒会長や部活動部長による挨拶や行事、部活動、ボランティア活動等、学校の取り組みをアピール。

- ・狭山池祭りで舞台周りに学校のブースを設置する。

学校としては初めてのことで、生徒会役員を中心に企画を作成中。多数の生徒が参加でき、地域にアピールできる内容にする。

- ・狭山池祭り舞台応援タオルのデザイン作成

狭山池祭り実行委員会舞台部会と共同で応援タオルを作成

令和6年12月28日、第293回狭山池クリーンアクション、年末スペシャルバージョンに参加しました。年に一度の豚汁等を提供していただく日です。多くの地域の方と協力して清掃活動に寒さ厳しいなかでも爽やかな汗をかきました。終了後は、ボーイスカウト第1団のお世話で豚汁や炊き込みご飯をご馳走になり、おかわりをいただきながら時間のたつのも忘れ、みなさんとお喋りして、大いに満足した年末の一日でした。

3. 結果

・年末スペシャルバージョンへの参加者は200～300人を目標としていました。実際は100人を少し上回る程の参加者でした。寒さも厳しく、終業式も終了しての冬休みで、年末の押し迫った日程を考えると多数参加してくれたと考えられる？今までは教員主導で参加を促していましたが、令和8年度からの普通科改革プロジェクトへ向かつての取り組みとして、今回は生徒（生徒会役員に任せて）主体で募集等すべてを考えて実行してもらった。

・令和7年4月の狭山池まつりに向けて、舞台周りの学校ブースの活用に関しては学校の広報、模擬店（飲食・縁日）出店、募金等を検討中。また、全校生徒にまつりを見に行くことを促し、アンケートを実施予定。

・舞台応援タオル作成に関してデザインを全校生徒に募集、販売等も学校ブースで行う予定で計画中。

4. 経験

・今まではボランティア活動として清掃に参加はしていました。スペシャルバージョンに関しては生徒主体で行ったこともあり、全校生徒への浸透ができていなかった。主体となった生徒会役員たちも清掃参加が狭山池まつりとどうつながるのか、や地域との協働等の意義をあまり理解できていなかった。

・狭山池まつりやクリーンアクションでの活動が今後の探究活動と、どううまくつなげて展開していくかをもう一度しっかり考えていく。探究活動では狭山池を知ること、歴史や伝説等様々なことを学び、地域にとっての重要性を認識して、清掃活動を通して水質や桜の害虫等問題点も含め教科横断的な学習が必要と思いました。

・学校ブースの活用では、特にアンケートの実施を行い、多くの高校生目線でのまつりの良いところや問題点等をまとめて、探究活動で課題解決を考え、できれば実行委員会と共有して取り組んでいきたい。

・例年に比べスペシャルバージョンへの参加が少なかった。



5. 学び

・うまくいったと思われる部分

毎年4月に行われている狭山池まつりには多くの生徒が準備、運営に関わり、出演等もしています。その経験もあり、クリーンアクションには参加しやすい。参加した生徒が地域の方から褒められる貴重な経験をする。新学科の探究においても狭山池まつりに関する課題等を設定し、考えやすい。

・うまくいかなかったと思われる部分

地域との協働？→生徒会役員にとって、今までの取り組みの振り返りができていなく、地域（実行委員会）とのコミュニケーション不足、お願いに依っているだけ。ブースでの計画も生徒がやりたいだけの企画になってしまう。一時のボランティア活動で、イベントとしての取り組みとなっている。スペシャルバージョンも生徒会役員からの個人的な感じの提案となり、組織的な取り組みとなっていない。生徒全体へ広がっていない。

・地域声を聴き、課題やニーズを共有する。

・地域のことをもっと知る。フィールドワークや地域資源（行政、公民館、博物館、図書館等々）の活用など探究活動や教科横断的な取り組みが必要。知識的な取り組みには、教員の協力が得られやすく、力も発揮してくれる。

・地域の知識→身近な存在→自分にとっての狭山池→生徒主体の探究→地域と協働

6. 法則

経験から

・自分ごとの課題として取り組んでいるか。取り組んでいて楽しくワクワクしているか？

・過去の取り組みの検証で良い点、悪い点を確認し、今後改善。アンケート等の実施で広く多くの意見を集約する。今後反映されれば、積極的な関わりにつながる。

・生徒も教員も地域とのコミュニケーションが必要。お互い（地域・学校）にとって必要とすること、できるかどうかを確認する。お互いにとっての利益とは？

ほかの場面では

・生徒にとっての進路実現（どんな仕事に就くかまで）

- ・いろいろな地域との協働や企業との協働
- ・探究活動の深まり

7. 計画

- ・コーディネーターとして生徒と一緒に地域（実行委員会）と意見交換

狭山池まつり→ブースの活用・高校生がしたいこと・やってもらいたいこと

クリーンアクション→単なる掃除だけでなく高校生だからできることを考える

探究活動で考えられる教科横断的な内容→教員や地域の協力、協働

- ・4月の狭山池まつりに学校全体として参加

主体としてかかわらなくても見学や遊びに行くだけでも良い（まずは体験）

→アンケート実施（良い・悪いところ、こうすれば良くなる・こうしてほしい等々）

→テーマ別に集約して探究活動で課題として解決や改善点等を考える

→生徒目線での狭山池まつり実行委員会への提言（プレゼン等で）として意見交換

- ・狭山池を知る→特に博物館の学芸員の活用

本校教員コーディネーター 報告

- 1、研修について（全ての研修のタイトル、開催場所、時期、研修内容について）

7月2日 「未来の兆しをみつける」 オンライン研修

研修者が未来を想像し、その未来に対応している地域の企業を見つめることで地域の未来、そしてあるべき人と人との関わり方について学ぶ。

8月8日 「プロジェクト・デザイン」 桜美林大学新宿キャンパス

事前に研修者が作成したプロジェクトデザインメモとプロジェクト計画シートを用いて「プロジェクト」について学ぶ。講師の実践例からプロジェクトの本質について学び、研修者の赴任校で実践すべきプロジェクトについて共有し理解を深め合う。研修内で中間発表を行う、グループ員が互いのプロジェクトを共有し議論する、翌日の研修に向けての課題等、プロジェクトをブラッシュアップさせる仕掛けが散りばめられている。

8月9日 「ワークショップ・デザイン」 桜美林大学新宿キャンパス

8日のプロジェクトを一晩練り上げ、発表と相互評価を行う。（プロジェクト・デザインの完成）ワークショップ、ワークショップデザインとは何かについて学ぶ。各学校現場において必要なワークショップについて考えるために、架空のシナリオからこういったワークショップを行うことが求められるのか、有効的なのかをグループ内で共有する。

8月30日 「STEAM教育のあり方」 オンライン研修

現在の校内でのSTEAM教育の様子の把握を事前課題として課される。本校では「STEAM教育」と意識して行われているものはほとんどないという現状であると研修者は把握している。STEAM教育に繋がるリソースは地域に必ずあるという研修内容である。また、STEAMの「A（リベラルアーツ）」に着目して教育に活かすことの重要性を学ぶ。地域内のSTEAM教育のリソースとなる企業や団体と連携し、社会的な課題を協働的に解決する学びに繋げたい。

9月30日 「『生徒指導提要（改訂版）』が示すこれからの生徒指導の方向性 ―チームで支える生徒指導の推進―」

生徒指導と地域の関わりについての研修。コーディネーターが教員経験者でない場合、生徒指導の方法と現代の生徒指導を学ぶことに意義があると思われる。

10月30日 「システム思考とデザイン思考」 三菱UFJリサーチ&コンサルティング本社

事前学習として『ソーシャル・プロジェクトを成功に導く12ステップ』、『SDGs人材からソーシャル・プロジェクトの担い手へ』の二冊の書籍の熟読と昨年度の研修動画を視聴の上、「高校コーディネーターが現場で活躍している理想の姿」と「高校コーディネーターが学校や地域等から活かされている姿」を考察する。現場ではグループごとに「未来共創新聞」作成のワークショップを行う。従来の「新聞作り」ではない、未来を想起した新聞の作成は、成功に至る過程を具体的に思考できるツールとなる。生徒の探究活動にも転用できるものであるのはもちろんだが、教員研修のツールとしての活用が見込めるものである。実際、教員研修で活用した学校の事例も紹介される。また、問題分析・プロジェクト分析の手法についても紹介される。

11月14日 「地域学校魅力化論」 オンライン研修

事前学習として隠岐島前高校と連携・協働しながら学びを作ってきた公立塾「隠岐国学習センター」の高校生が作成した動画を視聴の上、「地域と学校が混ざっていくことで、学校と地域それぞれに何が起こるのか?」「社会(地域)に開かれた教育課程を進めていく上で意識した方がいい点は?」について考察する。地域をリソースとした教育は探究的な学習にとっても効果的であるが、学校側からの一方的な搾取にならないようにしなければならないという講義を受講する。学校が地域から求められ、地域と学校が手を取り合って生徒が育っていくという状態が理想であると改めて感じられる講義である。生徒の成長のスイッチが地域交流に潜んでいた事例の紹介は胸を熱くさせる。また、社会(アウェイ)と関わることで慣れた場所(ホーム)で育った自身のアイデンティティの見直しが行われ、アイデンティティが多様化するという講義内容に地域交流の醍醐味を見た。企業と協働してマイプロジェクトを深める事例では、高校生のマイプロジェクトを企業が支援するだけでなく、企業に勤める大人のマイプロジェクトを高校生が深めていくという、双方に「気づき」を持たせるものである。地域や企業から高校が信用されていないと行うことのできない事業であると感じ、改めて地域交流が進めば進むほど生徒の探究学習に寄与されると感じさせられる。

12月3日 「学校と企業の持続的関係性の構築」 オンライン研修

事前学習として「企業と高校の関係性の深さ」および「その関係の状態」について分析する。「持続可能な地域」を作るためには「自己完結型人材」ではなく「連携力重視型人材」を育成する必要があるという講義内容である。事前課題から学校と外部団体との間には「垂直的關係」「水平的關係」「協働的關係」「持続的關係」があることを学んでいる。現在の本校が地域各団体とどのような関係を築くことができているのか考える契機となった。そして、現在の関係から未来の関係を想起し、どのような教育活動が求められるのかを学校全体で模索していく必要がある。また、企業との連携は企業の理屈を理解した上でつながることが求められる。本校が企業や地域の利益として提供できるものは何か、これも模索していかなければならない。

2月3日 「プロジェクトの成果」 文部科学省

事前学習として8月の対面研修で作成した自身のプロジェクトについての深い振り返りとそのプレゼン資料の作成を行う。研修開始すぐに班活動の中で自身のプロジェクトの振り返りを発表し、班員とともに学びを深めた。また、「オープンスペーステクノロジー」を用いた対話も行った。

2月4日 全国フォーラム 文部科学省

文部科学省主任視学官田村氏や東京都市大学佐藤教授の講演、CN研修全体の総括と展望が行われた。また、グループワークとしてワールド・カフェを用いた対話が行われたが、前日の研修の際に研修者の横田がファシリテーターに指名されており、グループをファシリテートし、ワーク終了後のまとめと発表も行った。講演もさることながら、全国から集まったCN・教員・行政関係者の中でとりまとめや発表をすることは大きな経験となった。

2、研修による本校への利活用について

8月8日・9日の対面研修では研修者が探究的な活動に取り組むことでPDCAサイクルを実感できた。ワークショップを考える研修から、校内での研修や課題解決に向けての方法を模索する必要があると感じられた。10月の対面研修での未来新聞作成、分析手法はともに本校の教員研修にも活用できると考える。本校の未来の姿を教員が想起し、その姿を実現させるためにはどういった問題や目的が必要なのかを分析することで、策定すべきプロジェクトに結びつくであろうと考える。オンライン研修では地域との結びつきが中心の研修が多かった。四十数年で築かれた本校の地域交流が探究活動にどう活かされるのか、そしてこれから先どのように地域交流を進めていくのか、改めて学校全体で考える契機を持ちたい。また、垂直的な関係ではなく、協働的・持続的な関係を企業や地域と築くために、本校と協働するメリットを学校全体で考えることも重要である。

3、所感等

地域連携、地域のリソースと本校の地域における価値を改めて考えさせられる研修であった。研修内容もちろんであるが、日本全国の普通科改革に取り組むCNや教員と出会えたことが収穫であった。

各地域での魅力的な取り組みを本校にも反映させたい。また、地域交流や地域探究に関する捉え方を肌感覚で掴むことができたことも収穫である。本校の地域交流しか知らなかった研修者にとって、諸地域の交流を学べたことは大きな意味を持つ。

研修全体のグランドルールである「『できない理由』ではなく『できる条件』を模索する。」という姿勢は学校全体で植え付けたい考え方である。このマインドで挑むことが、普通科改革を成功へ導くように実践する。

VII コンソーシアム会議 議事録

第1回

開催日時：令和6年7月23日（火）14:00～16:00

内 容：・コンソーシアムの役割について・狭山高校の取組について
・普通科改革支援事業について・P Tの本年度の実施計画及び進捗状況について

【主な意見】

- ・地域交流の対象地域については、大阪狭山市から以外から通学してきている生徒が多くいる実情も踏まえ、対象地域を広げることも必要。
- ・大阪狭山市は全市の小中学校を教育課程特例校とし、地域学習を実施している。小中学校と高等学校とがお互いに情報共有しながら進めていきたい。「こども議会」に係る取組の様子を見てみると、小中学生にとって、高校生との交流は非常にいい影響があった。生徒同士の交流も進めていくことができれば良い。
- ・令和5年度実施した探究授業では、狭山生の中にも大阪狭山市のことをあまり知らない生徒が多くいることがわかった。まずは大阪狭山市を知ってもらえるような支援ができたらと考えている。大阪狭山市の課題をテーマとして、課題の解決をめざす取組等においては、人員的な支援をしていきたい。
- ・探究活動について、これまでの取組では、生徒が調べ考えたものの発表までに留まり、効果的な実践までいってないのではないかと。生徒自らが実践し、成功体験を持たせるもたせることが必要である。
- ・新しいカリキュラムにおける「総合的な探究の時間」の配置について、1年生に単位数を増やして色々な実践させる機会を持たせることも効果的であると考え。1年生から探究活動を実施し、発表は2年生というように、3年間を通して実践を意識したカリキュラムを検討してほしい。
- ・生徒の潜在能力を掘り起こすことで、国公立大学等における総合型選抜での進学も見込めることができるのではないかと。
- ・属人的なカリキュラムではなく、システム化し持続可能な実施方法を構築すべき。

第2回

開催日時：令和7年1月15日（水）15:30～17:00

内 容：・事業の進捗状況について・大阪府立狭山高等学校グランドデザイン（案）について
・先進指定校の視察報告・先行実施授業について

【主な意見】

- ・大阪狭山市の課題をテーマとする取組を実施するにあたり、狭山高生にどのような資質・能力を身につけさせたいのかということ念頭に置いて、連携した取組が実施できたら良い。発表に留まらないものにされたい。
- ・探究学習のフィードバック、発表等の機会については、大阪狭山市のみならず広い視野で実施するべき。
- ・外部の視点、企業の視点からのフィードバックは、生徒にとって大きな影響があると考え。
- ・「子ども未来フォーラム」の取組の反省点として、子どもたちの提案した課題に偏りが見られた。高校生から課題を提示して、小中学生に与えるような方法も良いのではと考えている。
- ・これまでは、狭山高校が地域の中で「点」としてそれぞれ実施してきた交流が、事業の実施により、今後は「面」としての広がりが期待できるのではないかと。
- ・探究的な取組の実施にあたっては、学年を飛び越えた活動等についても、今後考えていくと良い。
- ・総合選抜型が進む現状を踏まえ、選抜を見据えた取組の実施もしたい。
- ・グランドデザイン（案）については、新学科1年めに携わる教員の育成が急務である。
- ・現在は担任が探究を担当しているとのことだが、今後は教員全体で探究学習を指導できるようにした方が良い。
- ・（昨年度総合型選抜で国立大学に進学した生徒の実情を踏まえ）当該卒業生の進学後の様子を知ることが、今後、取組を計画していく上で、ヒントになるのではないかと。

第3回

開催日時：令和7年3月27日（木）15:00～16:10 コンソーシアム会議と同時開催

内 容：・成果発表会について・次年度に向けた意見

【主な意見】・・・運営指導委員会議事録を参照

VIII 運営指導委員会 議事録

第1回

開催日時：令和6年7月24日（水）14:00～16:00

- 内 容：・狭山高校の取組について ・普通科改革支援事業について
・PTにおける本年度の実施計画及び進捗状況について
・第1回コンソーシアム運営委員会会議の報告

【主な意見】

- ・生徒が「自分ごと」として思考するために必要なものはなにか、を念頭に課題を設定することが大事。イベント型の連携にならないよう、大阪狭山市との取組をどこまで深く進めていけるかが課題。
- ・学校の外に出て、出た先にある問いや課題を見つけていくことができれば良い。大学訪問であっても、外部との交流の先に、生徒が自ら問いを見つけられることが大事。
- ・地域に出ていく活動の中で気付いた問いや課題について、世界ではどうなっているのだろうかという視点に繋げていければ良い。世界に目を向けることができるようなアプローチをしていきたい。
- ・他の地域から進学している生徒も多い現状ではあるが、あくまでも探究のフィールドを大阪狭山市として、幅広く探究活動を進めていければ良い。
- ・近隣地域には大学が多くあるので、大学生を活用するという視点もある。実際に大学生を活用した取組みを実施している高校がある。興味を持っている大学生もいるので、プログラムをしっかりと作って、うまくマッチングできれば良い。
- ・地域の公民館におけるイベントに、高校生が関わってくれることは大変ありがたい。
- ・広報活動の進め方について、特に中学生に対しては丁寧に説明をしていくべき。

第2回

開催日時：令和7年1月17日（金）15:30～17:00

- 内 容：・事業の進捗状況について ・グランドデザイン（案）について
・カリキュラム編成（案）について ・コーディネーターより報告
・先進指定校の視察報告

【コーディネーターからの報告】

- ・以前から狭山高校では、色々な団体と連携しボランティアを含めた様々な協働活動を実施していく中で、地域の方々に褒めてもらえる経験が、生徒の自己肯定感を育み、看護や教育関係等の進路志望にもつながっている。
- ・予測できない社会の現状を踏まえ、更なる地域との関わりの重要性を感じている。

【主な意見】

- ・カリキュラムについて、1年に「総合的な探究の時間」を置き、探究に触れる機会を設定したことは良い。
- ・探究活動の実施にあたっては、単にイベントに参加させるのではなく、探究学習としてどのように参加させるか、どのように関わっていくかを考えることが大事。
- ・1年においては、探究に取り組んでいくための基礎的な活動を行わないといけない。
- ・コンソーシアムや運営指導委員会の委員も、探究学習の指導等に使ってもらいたい。
- ・どんな卒業生になってほしいのかというイメージを持つことが大事。教員がロールモデルを共有できると良い。
- ・キャリア形成が事業の見せ方として重要だと考える。ゴールを提示できたら、問題発見能力の高い生徒の育成につながり、社会でも役立つ存在となる。
- ・それぞれのミッションのゴールについて、どこまで到達できているかをアセスメントする必要がある。
- ・狭山高校が都市部の学校としてどのように取り組んでいくかが課題である。一方で普遍性をもった、探究学習の構築も必要。

第3回

開催日時：令和7年3月27日（木）15:00～16:10 コンソーシアム会議と同時開催

内 容：・成果発表会について ・次年度に向けた意見

【主な意見】

- ・発表を見たうえで、生徒の熱い思いがあっただけのことを調べてと思うが、「why」となる部分の掘り下げをもっとしてもらえたらいい発表となったのではないか。「How」の思考視点も含めて探求が完結するようないいものをつくってもらいたい。
- ・大学模擬ゼミのテーマについて、生徒が各自でテーマ設定をしていることが素晴らしいと感じた。
- ・生徒の真面目さがとても感じる発表であった。日々の学びの積み重ねではないかと感じた。JICA 関西においても出前授業等で協力していきたい。
- ・探究的な学びについて、最終的なゴールとしてウェルビーイングの実現を目標のひとつとして挙げている、そのために教員間の意識改革を含めた研修の実践を次年度進める。
- ・狭山高校の生徒は、「誰かのために活動ができた」という時に能力を発揮する生徒であると考え。今回の発表についても「誰かのために発表する」という問立ができたことによって、発表内容についても非常に大きくブラッシュアップされていったと考える。
- ・探究学習におけるパッケージ化を進める中でコンソーシアム委員、運営指導委員の皆さまからの支援を賜りたい。